

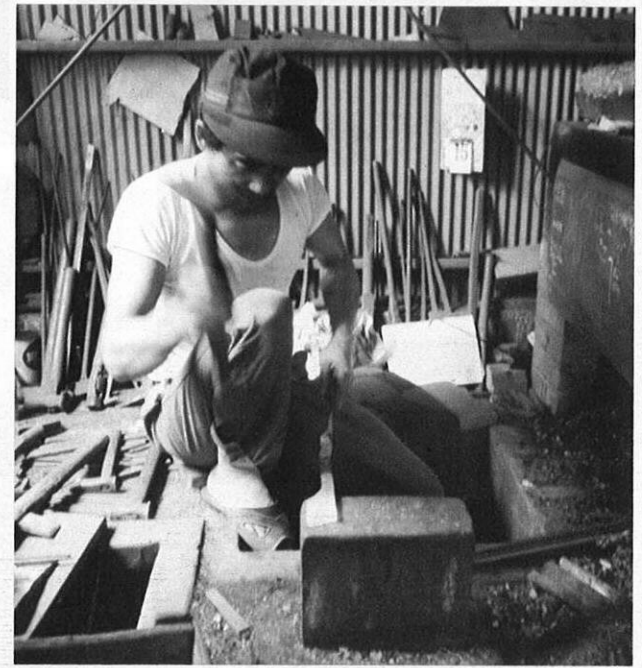


◇産業風土記 川尻の刃物

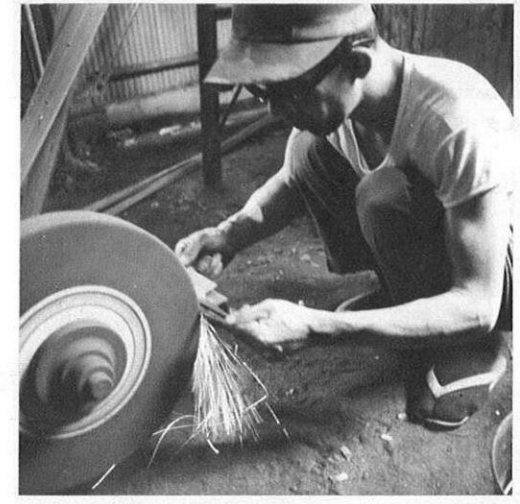
(熊本市川尻町)

川尻の国道三号線添いは、刃物鍛冶屋が多く見られる。鍛冶屋ができたのは、今から四八〇年前(文明年間)というから、歴史は古い。

明治時代までは、横町に集まっており、横町一帯を鍛冶屋町とも呼ばれていた。現在は刃物屋は九軒。うち四軒で刃物組合を作っている。川尻の刃物は、三丸印がトレードマークで、主に包丁・鎌・ハサミ類、それに農機具類など。県内はもとより、福岡・大牟田へ出荷されているが、熊本市での植木市では、特に人気がある。

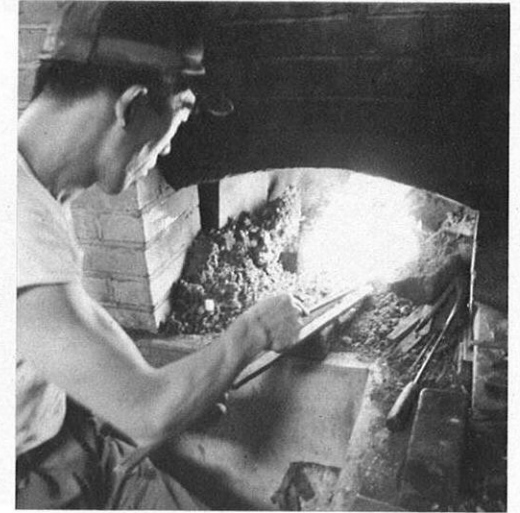


▲鉄は丹念にうちのはされ、ならされながら刃物の強じんな体質を高めていく



▲グラインダーで何度も何度も研ぐ 仕上げ前の刃ならびの調整はやはり慎重だ

▼鉄を焼く たたく。さらに焼く、そしてハガネが入る 魂が入る。



▼人間の手にて造形された「商品」がシャープな刃先を見せて店頭へ 手造りの頑丈な美しさかそこにある。



△ここに人あり▽ 花の譜

★阿蘇郡高森町
山村純代さん

窓いっぱい山ひだもあらわな根子岳が見える明るいアトリエ。描きかけのキャンパスにはうす紅色の夢(たで)の花群。短か目に束ねられた銀髪が美しい。言葉の端々の張り。七十七歳とはとても思えない若々しさ。

「年ばかりですとだんだん気持ちが若くうなってますね、子どもたちともいきなり意気投合したりして……」眼鏡の奥の目が細く笑う。山村さんが好んで選ぶ題材は花。それも野の花やパンジーのような可憐な小さな花。

「この間、ひなげしを描いていたら動くですよね。しまいには気味が悪うな……」……。ばらの花が開くときには、パツと音がしたりして、花は生きとつてすね」花と対峙する時の山村さんの張りつめた心と、鋭い観察力をかいま見た。

誕生祝いにアトリエ開き

山村さんは明治十七年、阿蘇郡宮地町(いまの一宮町)に生まれた。幼小から見なれた竹村(田能村竹田の弟子)の

屏風絵に心ひかれて、ひとりひそかに絵を志す。尚絅高等女学校のとき、心をきめて美術学校の試験を受けるつもりだったが、強いての両親のすすめで卒業と同時に婚約。「嫁いでも、子どもを育て上げてしまいうまでは絵筆を忘れない」父の言葉に心の奥にしまつて高森町の山村家の人となった。

その頃はまだ鉄道がなかった。花嫁さんに乗せた四輪馬車は笛をならしながら、一日がかりで山を越えて行った。

「戸下あたりでお昼になりました。ちょうど菜種の花がさかりで、まだ十八のわたしは何かしら人ごとみたいな気分でした。」それから四十数年——山村さんは四男三女を立派に育て上げた。

NHKの「私の嫁入り」というTV番組に出演した山村さんが「ほんとうは女学生の頃、美術学校へ行きかけたのを……」このいわばとっておきの話は家族のものみんなが初めて耳にした「秘話」だった。その年の六十一歳の誕生日、彼女の部屋に飾られた思いがけない絵の道具一式のプレゼントに山村さんの目がうるんだ。「子どもや、孫たちはわたしにまだまだ働いて貰わんと困るといっていてすね……もうろくせんごつてっしょね。」



絵を描く 愛されるおばあちゃん

「絵を描くおばあちゃん」で通っている山村さんのファンの層は広い。絵をいただいたお礼にと町の娘さんからレース編の花壇敷が届いたり「絵に描いてはいいよ」と花や果実を近所のおばあさんたちがわざわざ持ってきてくれる。新聞記事で山村さんのことを知って淋しきの余り手紙を寄せた人吉の不運な老人を勇気づけるため、山村さんは早速、花の絵を送った。そして心の文通がいまも続いている。町の老人の集いで山村さんは「なん

でもいいから自分でやれる仕事を一つしよう、例えば戸締りを責任をもってやるとか。何か一つ確かな役目を……」と主張する。町の調停委員のほか教育委員を勤めて、ことしで十八年目、よく学校を訪問するので生徒たちとも顔なじみだ。

「なにしろ日が短うしてすね、絵が描けるということはやっぱりわたしの生き甲斐のごたつです。」喜寿のお祝いに個展でも開いたらというすすめもあるが山村さんはただ照れるばかり。フト見上げると書架の上の大輪のひまわりの絵がひときわさん然と夕日に映えていた。